

令和 2 年 7 月 10 日現在

機関番号：34302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02907

研究課題名（和文）複言語・複文化活動を通じた学びの共同体の構築と有効性：外国語系学部と地域の協働

研究課題名（英文）The learning effects of community-based projects for university students from a plurilingual perspective

研究代表者

吉田 真美 (Yoshida, Mami)

京都外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：80300242

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本プロジェクトでは、外国語系・国際系学部の学生の語学能力の向上や専門知の修得のみならず、自律性、協働的成長、市民性や国際的専門性の育成を目指して、地域（図書館や小学校、高等学校、博物館等）との連携による協働活動を通じた、非正課及び正課教育プログラムを実施した。その結果、学生の有する複言語・複文化的リソースが地域社会からのニーズに合致し、地域社会で活かされたことから、単言語及び外国語教育に特化するのではなく、複数の言語を扱う複言語・複文化主義に基づいた包括的な言語体験により、大学生だけでなく、多言語化の進む地域社会にも意義のある活動となることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

単言語及び外国語教育に特化するのではなく、複数の言語を扱い、外国語教育だけでなく様々な分野（文化政策、移民）との連携により、複言語・複文化主義に基づいた包括的な言語体験が可能になり、大学生だけではなく多言語化の進む地域社会においても意義は大きい。また、協働を通して地域に貢献することで、学生が自分の適性を判断し、語学を学ぶことで社会にできる貢献が何かを具体的に考える機会となりキャリアと結びつけて、外国語を学ぶモチベーションへとつながる。従来の外国語教育成果の数量的評価に加えて、外国語を学ぶ動機づけやジェネリックスキルを含む包括的な視点から、学生の学びや変容の質的な評価を試みるものの有効性が示せた。

研究成果の概要（英文）：Based on the perspectives of plurilingualism and pluriculturalism, five subprojects were conducted involving community collaboration designed both in and outside the curriculum for university students in this project, such as ones involving local communities such as a library, high school, elementary schools, and those involving agencies outside the university such as international students, and local residents, and experts in specialized fields. The learning effects of the program and its impact on the community were examined and It was suggested that the implementation of comprehensive field-based plurilingual activities were meaningful in terms of their language acquisition and disciplinary knowledge focusing on such elements as developing their autonomy, collaborative growth, citizenship, and international professionalism.

研究分野：英語教育

キーワード：学びの共同体 地域連携 複言語主義 外国語系学部の学生 複文化主義 フィールドワーク 地域貢献 外国語学習

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

複雑かつ絶えず変動する社会状況に対応するために必要な能力として、経済協力開発機構(OECD)は21世紀初頭、自律的に行動する力、言語やテクノロジーなどのツールを相互作用的に用いる力、多様な社会グループで交流する力の3つをキー・コンピテンシーとして提示した。さらに、2030年に必要とされる資質能力として協働型問題解決能力とグローバル・コンピテンシーが挙げられており、国際レベルで、協働力や、グローバル社会での多様性の尊重、シチズンシップの涵養が教育の重要な目標とされる。しかしながら、グローバル社会での協働力を視野に入れた外国語教育の実践は乏しい。従来は語学資格試験対策や語彙力増強といった狭い意味での外国語運用能力育成に重点が置かれる傾向にあった。

これからの時代に必要とされる外国語能力とは、社会や個人のニーズに合わせて、複数の言語やその背景にある文化的知識を運用していける能力である。しかし、こうした学びを深めることは教室内だけではもはや難しくなっている。つまり、外国語を学ぶ学生と外国語ニーズをもつ地域社会を有機的に結び付け、目先のニーズにとらわれすぎずに、相互作用的にインパクトを与えあい成長することができるような共同体を作ることが求められているのである。

2. 研究の目的

このような背景から、本研究では、外国語系学部の外国語教育として「外国語を用いて多様な社会グループで交流する力」を高め、グローバル社会でのシチズンシップを身につけさせるために、学びの共同体を地域との連携によって構築することで、協同学習及び、プロジェクト型の学習を展開した。そこで以下の研究課題を設定し、有効性の検証を試みた。(1) 複言語主義、複文化主義の視点から、言語活動や異文化理解活動を通して外国語系学部の学生による地域貢献を実現させることのできる学びの共同体を構築する。(2) 外国語系学部の学生が、協同学習やフィールドワーク、プロジェクト型学習の経験をするることによって、専門分野においてどのような学びが得られたかを検証する。(3) 観察やインタビュー等を通し、プロジェクトの実施が共同体へ与えた影響を調査した。

3. 研究の方法

近隣の学校(例:小学校、高等学校)、図書館、自治体など、協力団体を開拓し学びの共同体を構築し、地域との連携を通して言語活動や異文化理解活動を通じた外国語系学部の学生によるプロジェクトを実施した。言語やコンテンツによって内容を学生と考案し、地域の学校や団体側にフィールドの提供の依頼をしたり、コンテンツ作成の指導と支援を行った。次に、協同学習やフィールドワーク、プロジェクト型学習の経験をするることによって、専門分野においてどのような学びが得られたか、取り組みの有効性を検証すべく、参加する学生を対象に、観察や事前事後インタビュー、アンケート等の手法を用いて、学習効果に関する量的及び質的データ(外国語を学ぶ動機づけ、学習方略、ジェネリックスキル、他どのような学びがあったのか)を多面的に分析した。

4. 研究成果

本研究において実施したプロジェクトの活動内容を表1にまとめた。以下は分析方法の開発成果及び活動概要である。またプログラムの有効性についての検証結果の詳細は吉田、他(2020)を参照されたい。

(1) 学習効果測定のための尺度開発(研究協力者:梶川・村上)

大学と地域コミュニティ、またはその関連機関との連携によって展開した協働体験プロジェクトのより効果的な学習をもたらす展開のための示唆を得るべく、有効性を多面的に検証するために、学習効果を測定する尺度を開発し、実践による教育効果及び共同体に与える効果を活動前と活動後で比べて学生の変容を考察した。多様な活動の成果を評価するための客観的指標作成のための基礎資料の収集を目標として質問紙を作成した。活動参加によって学生に生じると推測される要素を測定するための項目を設定した。具体的には、行動の特性(1~4)、情緒面の特性(5~9)、自己認知(10~15)、参加への動機づけ(16~26)、思考方略(27~39)、多様性の理解(40~48)、自己効力感(49~60)である。これら項目で活動参加の事前と事後に調査をおこない、その変化の有無と方向性を知ることとした。項目作成にあたっては、吉田(2020)を参照されたい。

(2) 「サイエンス・コミュニケーション」(研究分担者:畑田)

「サイエンス・コミュニケーション」という正課の授業で、京都外大の近隣にあるY児童館で、「やってみよう!紙飛行機対決」と題したプロジェクトを行った。折り方や紙の種類によって飛距離が違うことを子どもたちでも実感してもらうことを目的とした。

授業初回のガイダンス時と、プロジェクト終了時に、「教育実践における大学生の学びに関するアンケート」を実施した。事前・事後で 60 項目中 43 項目に有意差が見られ、すべてで事前から事後で評価が肯定側に移っていた。「子ども」という、感情が表情に出やすい対象が喜んでい姿を見ることにより、自分たちのプロジェクトの成功を実感し、自己肯定感が高まったことの表れではないかと考えられた。これらの成果は第 29 回、第 30 回の日本環境教育学会で発表し、高い評価を受けた。

(3) コミュニティ・エンゲージメントプログラム（研究分担者：河上）

学科の正課として夏期に京丹後でおこなったコミュニティ・エンゲージメントプログラムの事前授業および引率を担当し、そのなかで参与観察を行いながら、事前・事後において「教育実践における大学生の学びに関するアンケート」を実施し、本科研メンバーとの共著でその結果を残すことができた。

課外での活動としては、和歌山県美浜町三尾地区（アメリカ村）にて引き続き学生活動を展開し、日系カナダ人向け英文 Web サイトを日本とカナダの協力者と連携し完成することができた。
<http://wakayama-american.com/>

その他、滋賀の愛荘町での日系カナダ人のルーツ探し協力や、和歌山市内の市民向け講座での学生による登壇などの機会があり、学生の学びの場を支えるコミュニティの外延を広げることができたとともに、コミュニティとの対話やニーズをもとに活動を発展させることができた。

(4) 大学生・留学生・高校との連携による語学スタディツアー（研究分担者：島村・南）

2019 年 8 月 5 日から 7 日にかけて、地域と連携し、「大学生・留学生・高校との連携による語学スタディツアー」を実施した。参加者が各々のリソースを活かしながら、異文化理解に関するグループ発表に取り組み、成果として最終日に外国語でのプレゼンテーションを行った。取り組みの様子が、『福井新聞』（2019 年 8 月 6 日、地域 23 面）に掲載された。事前学習とスタディツアー最終日に振り返りアンケートを行い、プログラムの教育効果と示唆を吉田他（2020）にて報告することができた。

(5) 多文化・多言語絵本読み聞かせプロジェクト（研究分担者：中山、吉田）

複言語主義、複文化主義の視点から、京都の図書館において、外国語大学の学生による多文化・多言語絵本読み聞かせプロジェクトを実施した。専攻する言語が異なる外国語大学の学生が（英語・中国語・フランス語・ポルトガル語）、近隣の図書館との連携で、様々な言語での絵本の読み聞かせ、ゲームや歌などで多文化・多言語を紹介した。振り返りやインタビュー等から学生が得た学びについて考察し得られた教育効果についての示唆を得た。また参加者へのアンケートから、活動が地域にどのようなインパクトを与えたのかを考察し示唆を吉田、他（2020）にまとめた。

(6) コミュニティ・エンゲージメント活動（研究分担者：南）

本学の学芸員資格課程講座における、国際文化資料館の外部連携活動としての「コミュニティ・エンゲージメント活動」及び 2018 年に新しく創設された国際貢献学部必修科目として、福井県越前町熊谷において、越前フィールドミュージアム活動（以降、CEP 越前）「地域住民交流センターくまカフェ」の活動を実施した。正課科目としての CE の学修効果を統計的手法と、学生の活動や生活状態を観察した定性的分析から以下のことを明らかにした。学生が複言語を学習することのきっかけにするためには、地域に寄り添い、地域の資産とニーズを掘り起こし、地域の生活・文化に関わる課題を地域住民と交流しながら発見し、解決していく能力が必要である。自律性、協働的成長、市民性や専門性の育成を目標とする学習として教室と共同体を結び付けることで、学生の協働、または地域との協働を通じた学びが、学生を成長させることができる。

(7) 小学校英語ボランティア（研究代表者：吉田）

英語の教員養成課程において対象言語の言語システムや教授法の知識を得るだけでなく、実践者としての自らの経験を分析する研究手法を身に着けることが実践指導力を高める効果的な方法であると考え、授業実践の機会を提供すべく京都市内及び近隣の小学校校において本学の学生による英語活動指導ボランティア活動を実施した。教職志望の学生にとっては教授技能や職業意識の変容に影響することや（吉田・相川 2020）、教員志望でない学生に対しても、英語の指導に特化した学びではなく社会人として今後活用できる汎用性のある能力を身に着けられ、協働作業における重要な要素を学ぶ機会となっていることや、教職以外のキャリアへの方向付けにも貢献していることが分かった。

本研究プロジェクトでは、多様性を教育的資源として、立場の異なった背景を持つメンバーから帰納的・探究的に学び、社会参加及び貢献に繋がられる場を学生に提供することで、学生が地域コミュニティにとって解決すべき課題が何かを自発的に考える機会となり、大きな学習成果を生むことに繋がったと考えられる。活動参加によって、自己の適性を判断し、外国語や専門領域を学ぶモチベーションに繋がったり、キャリアと結びつける可能性も示せた。今後の課題として、長期的な観点から活動の効果を、大学側だけでなく、連携先のコミュニティや

組織にも共有できるような形で検証していくことや、参加学生が体験を評価し、言語化及び可視化する場の構築と継続を目指したい。

表1：地域との連携による各種協同学習プログラム

プログラム名	多文化・多言語絵本読み聞かせプロジェクト	コミュニティ・エンゲージメント活動	文系大学におけるサイエンス・コミュニケーション	大学生・留学生・高校との連携による高大連携型語学スタディツアー	小学校英語ボランティア
プログラムタイプ	体験型プロジェクト(正課外)	地域調査・貢献活動(正課)	児童館でのプロジェクト実施(正課)	宿泊を伴う交流および発表活動(正課外)	学習支援体験(正課外)
実施場所と期間	単発の活動・近隣の図書館	地域に泊まり込みで5週間 現地月1回3～5日を5回実施	単発の活動・近隣の児童館	単発の活動：地域の活動拠点	月に一回の定期的な活動と、単発の活動：近隣の小学校
対象学生	専攻する言語が異なる学生(英語・中国語・フランス語・ポルトガル語・イタリア語・ドイツ語)	観光学科の2年次生	サイエンスコミュニケーションを受講する3、4年生	中国語を専攻する日本人大学生・高校生、日本語専攻する中国人留学生	主に教職課程の学生
連携機関	近隣の図書館	地域コミュニティ、役場、企業、観光公社、NPO、大学など	Y 児童館	福井県越前町熊谷の地域住民交流センターおよびその周辺	京都市、高槻市内の小学校
目標と概要	言語・文化の壁を越えた協働活動を通して、多文化共生社会のあり方について考え、次世代に伝えたいことを模索してもらう。	一定期間、地域社会での暮らしやその地に根ざした活動を通して問題を発見し、その解決に貢献できる人材育成を目指す。	反応が分かりやすい子どもを対象に、紙飛行機を題材としたプロジェクトを実施。科学的バックグラウンドの代わりにコミュニケーション能力を持つ外大生が、サイエンスコミュニケーターとしての経験を積む。	高大連携による交流・発表活動と地域貢献作業。外国語でのコミュニケーション能力の向上と異文化理解力・社会人基礎力の育成を目標とする。	小学校での外国語活動を実施。教職に就く学生の指導力向上と児童の英語への動機づけと国際理解を目指す。
評価方法	学生へのインタビュー、来訪者へのアンケート	参与観察および実習中の面談、学生へのアンケート、学生が書いた毎日の活動記録、LINEでのやりとりの記録、地域住民へのポスター発表・口頭発表	学生アンケート、児童へのアンケート	参加学生へのアンケート、連携機関協力者へのインタビュー	学生へのインタビューと学生アンケート、児童へのアンケート

沼田 潤 (2010) 「日本人大学生の異文化理解に関する質問紙調査 : 異文化理解の意識に関わる諸要因の基礎研究」 『評論・社会科学』 91、169-188

島村 典子 (2020) 「小組合作学習模式与問卷調查的实践總結」 『国際漢語教学案例理論与实践』、中国書籍出版社、97-112 (招待あり)

梅本 貴豊、伊藤 崇達、田中 健史朗 (2016) 「調整方略、感情のおよび行動的エンゲージメント、学業成果の関連」 『心理学研究』 87 (4)、334-342

吉田 真美、畑田 彩、梶川 裕司、河上 幸子、南 博史、中山 智子、島村 典子、村上正行 (印刷中) 「複言語・複文化活動を通じた共同体での発展的学び: 連携型アクションリサーチの試み」 『研究論叢』 95号

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 吉田 真美、相川 真佐夫	4. 巻 42.1
2. 論文標題 指導体験が及ぼす教職志望学生のアイデンティティの変化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JALT Journal	6. 最初と最後の頁 29-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島村 典子	4. 巻 17
2. 論文標題 基于大学生中文能力差異的小組合作学习策略与实践	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国語教育	6. 最初と最後の頁 109-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩崎 千晶、千葉 美保子、遠海 友紀、嶋田 みのり、村上 正行	4. 巻 Vol.39, No.2
2. 論文標題 ラーニングコモンズを主軸とした学習環境・学習支援のデザインを考える	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 105-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島村 典子	4. 巻
2. 論文標題 小組合作学习模式与問卷調查的实践総結	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際漢語教学案例理論与实践 中国書籍出版	6. 最初と最後の頁 97 - 112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河上 幸子、東 悦子、西山 巨章	4. 巻 26
2. 論文標題 「和歌山アメリカ村の地方創生とルーツ・ツーリズム 移民研究の社会還元に向けて」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 移民研究年報	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田 真美、畑田 彩、梶川 裕司、河上 幸子、南 博史、中山 智子、島村 典子	4. 巻 95
2. 論文標題 複言語・複文化活動を通じた共同体での発展的学び：連携型アクションリサーチの試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 研究論叢	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 河上 幸子（当日は欠席のため第三者が代読）
2. 発表標題 Choyuk jawonuroso iminmunhwa -Japantawungua ilbon americamaule sare (超域資源としての移民文化ー米国のジャパントウン、日本のアメリカ村の事例から)
3. 学会等名 2019年BKプラス共同国際学術大会"New Understanding and Utilization of Local Culture Resources" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 島村 典子
2. 発表標題 基于大学生中文能力差異的小組合作学习策略与实践 - 以社会贡献為目標
3. 学会等名 漢語國際教育專業建設研討会 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hiroshi Minami
2. 発表標題 A quienes sirve la Arqueologia Publica?; Un vinculo entre la arqueologia y el publico local
3. 学会等名 I SIMPOSIO DE ARQUEOLOGIA PUBLICA EN EL SALVADOR “Mas alla de la arqueologia: Arqueologia Publica” (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 巻下 由紀子、村上 正行、西出 崇、石川 保茂
2. 発表標題 国語学習におけるソーシャル・ラーニングの効果についての考察
3. 学会等名 日本教育工学会第34回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mami Yoshida
2. 発表標題 The Impact of Teaching Project on Student Teachers' Identity Formation
3. 学会等名 The 50th Anniversary Meeting of the British Association for Applied Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Sachiko Kawakami, Etsuko Higashi, Kazuya Tanaka, Hiroaki Nishiyama
2. 発表標題 Developing "Glocal Heritage Education" for a Sustainable Future: Universities-High School-Municipality Collaboration for the Regional Revitalization of American Village in Wakayama”
3. 学会等名 University-Community Engagement Conference 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 村上 正行, 西出 崇
2. 発表標題 大学における学修成果の可視化に関する実践と検討
3. 学会等名 日本教育工学会第33回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 遠海 友紀、嶋田 みのり、村上 正行、稲垣 忠
2. 発表標題 大学での学習における学生の問題解決行動の分類 ラーニング・コモنزの学習相談に対する文系学部3年生の認識
3. 学会等名 日本教育工学会第33回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 嶋田 みのり、遠海 友紀、村上 正行、稲垣 忠
2. 発表標題 ラーニング・コモنزの学習環境に対する学生の認識
3. 学会等名 日本教育工学会第33回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 吉田 真美、崔 允誌
2. 発表標題 複言語環境で育った学習者のアイデンティティの変容：十全参加のための「投資」が「豊かな資源」になるまで
3. 学会等名 言語文化教育研究学会 第6回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 河上幸子
2. 発表標題 カナダ移民の記憶と遺物の継承：現在から未来へと続く町のにぎわい創出へ 京都外国語大学の取り組み
3. 学会等名 日本移民学会第29回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河上 幸子
2. 発表標題 超域資源としての移民文化 和歌山アメリカ村の地方創生と日系カナダ人のルーツ観光
3. 学会等名 比較文明学会関西支部第44回例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 畑田 彩
2. 発表標題 PBL授業「サイエンス・コミュニケーション」の実践報告 Part2 - 評価編 -
3. 学会等名 日本環境教育学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 畑田 彩
2. 発表標題 PBL授業「サイエンス・コミュニケーション」の実践報告 .
3. 学会等名 日本環境教育学会第29回大会 .
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 巻下 由紀子、西出 崇、村上 正行
2. 発表標題 ソーシャル・ラーニング活動が学習の動機づけに与える効果についての分析
3. 学会等名 日本教育工学会研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 辻 美也子、河野 弘美、村上 正行
2. 発表標題 自律学習支援における留学生との会話プログラムによる学習の変容
3. 学会等名 日本教育工学会2020年度春季全国大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 矢野 裕俊、梶川 裕司、古瀬 麗、南 有香、堀 美和	4. 発行年 2018年
2. 出版社 尼崎市こども青少年本部	5. 総ページ数 161
3. 書名 尼崎市子どもの生活に関する実態調査 結果報告書	

1. 著者名 重野 亜久里、高崎 愛里、梶川 裕司、他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 一般財団法人日本医療教育財団	5. 総ページ数 508
3. 書名 「医療通訳」（内「11章医療従事者と患者の文化的および社会的背景についての理解」「12章医療通訳者のコミュニケーション力担当」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	南 博史 (Minami Hiroshi) (00124321)	京都外国語大学・国際貢献学部・教授 (34302)	
研究分担者	河上 幸子 (Kawakami Sachiko) (30586730)	京都外国語大学・国際貢献学部・准教授 (34302)	
研究分担者	畑田 彩 (Hatada Aya) (90600156)	京都外国語大学・外国語学部・准教授 (34302)	
研究分担者	島村 典子 (Shimamura Noriko) (30724273)	京都外国語大学・外国語学部・准教授 (34302)	
研究分担者	中山 智子 (Nakayama Tomoko) (80434645)	京都外国語大学・外国語学部・教授 (34302)	
研究分担者	村上 正行 (Murakami Masayuki) (30351258)	大阪大学・全学教育推進機構・教授 (14401)	
研究分担者	梶川 裕司 (Kajikawa Yuji) (40281498)	京都外国語大学・外国語学部・教授 (34302)	